

## 地域資源を生かした豊かな生活文化の創造をめざして - ラップランドと山口における地域プロデュースの実践的研究 -

Towards the creation of a rich cultural life taking advantage of local resources; practical research about regional products in Lapland and Yamaguchi

研究代表者 水谷由美子 ラップランド大学代表 Marjatta Heikkilä-Rastas  
共同研究者 井生文隆 田村 洋 松尾量子 小南英昭 山口 光 小橋圭介  
Yumiko MIZUTANI Fumitaka IO Hiroshi TAMURA Ryoko MATSUO  
Hideaki KOMINAMI Hikaru YAMAGUCHI Keisuke KOHASHI

### はじめに

2009 - 2011年国際文化学部国際共同研究は、国際文化学部文化創造学科企画プロデュース系のメンバー7名によって実施されているもので、以下は研究代表者である水谷由美子が代表して途中経過報告を記述するものである。2012年に最終的な成果を出す予定である。

本研究は国際文化学部文化創造学科の創設コンセプトである、国際的な視点に立って地域の文化や歴史などの資源を発掘・創造・発信することに基づき行われてきたものである。この研究の予備的な研究活動として、2007年に文化創造学科創設記念シンポジウム「フィンランドと山口における豊かな生活文化を目指して」を本学講堂桜園会館にて実施した。ここでは地域の人々を観客に招き、本学の地域貢献を目指すデザイン活動の姿勢を伝えた。

筆者はコーディネータを務め、パネラーとしてフィンランド側からはヘルシンキで活躍するデザイン・マネジメントのラウラ・サルヴィリンナとファッションデザインとインテリアデザインの両分野で活動をしているデザイナー新留直人の二人を招いた。

さらに山口側は本共同研究者である井生文隆と社団法人山口県デザイン協会理事貞廣安彦（現監事）がパネラーとなり、山口における地域資源を活用した創作活動が紹介された。

フィンランドと山口との自然や文化の比較を基礎としながら、エコロジーやサステナブルをキーワードとして、豊かな生活文化の創造を目指した活発な議論が展開された。

そこで山口における地域のプロデュースに関する共同研究をする相手先として、フィンランドの大学を視野に入れつつ、いくつかの候補を模索した。

2008年には、国際共同研究について中国青島大学でファッションショーに参加し、中国との共同研究を検討した。さらに、バージン・コモンウェルス大学カタール校を訪問し、講演とファッションショーを実施しながら、国際共同研究の可能性を話し合った。

フィンランド国立ラップランド大学に関しては2007年3月に井生文隆と筆者が学生とともに訪問し、ワークショップやファッションショーに参加した。その結果、双方に信頼関係が生まれ共同研究を行う可能性が出来た。各大学調整の結果、国際共同研究の相手先として、ラップランド大学デザイン学部および大学院デザイン研究科を選んだ。

筆者とフィンランドとの繋がりはずでに10年近い、2000年にヘルシンキ市立美術館で山口県立美術館との姉妹館提携記念展覧会「雪舟とその弟子たち展」のミュージアムグッズとしてTシャツを企画・プロデュースしたことがある。現地の展覧会の様子と販売の状況を自分の眼で確かめるために、初めてフィンランドに出かけた。その後、2002年にヘルシンキ芸術デザイン大学に客員教授として滞在したことが、より深くフィンランドのデザイン界に親しむきっかけとなった。

2000年にはすでにラップランド大学デザイン学部を訪問してもいた。2002年から共同研究に至るまでになった個人レベルでの経緯については、『国際服飾学会誌No.38』<sup>(註1)</sup>に記しているので参考にされたい。

ラップランド大学との共同プロジェクトの直接的な経緯を改めて記す。2006年に井生文隆がラップランド大学に

滞在し、現地大学のプロダクトデザインとファッションデザインの両領域で学生交流を含めた創作研究交流を具体的に話し合いがされたことによる。その提案を受けて、2007年3月に井生研究室では現地でワークショップを実施し、プロダクト作品を制作し、展覧会を催した。

水谷研究室は、ラップランド大学の10周年記念ファッションショーに参加することになり、大学院国際文化学研究科の学生2名、生活科学部環境デザイン学科（現在、国際文化学部文化創造学科企画プロデュース系に移行）学生2名、計4名の学生が参加した。この時に、ファッションデザイン系教授マルヤッタ＝ヘイッキラ ラスタス Marjatta Heikkilä-Rastas教授とテキスタイルデザイン系クリスティーナ・ハンニネン Kristiina Hänninen教授と知己を得て、今後の共同研究の可能性について話し合った。その時に両教授が我々との交流に非常に積極的であったことと、山口県立大学学生のファッションショーへの参加作品のレベルを彼女たちが評価したことが双方の信頼関係を生む要因であった。これを土台にして筆者の領域から共同研究を企画立案した。

そこで、2008年度に計画を立て、2009年度から3年間の共同研究を始めた。

その主な計画は表1に記す。以下の2章から4章は、2009年から2011年12月までの共同研究の途中経過について報告する。

表1 共同研究のための3年間計画

| 年 度                          | 山口県立大学→  | 融合計画  | ←ラップランド大学   |
|------------------------------|--|---|---|
| (2009年度)<br>※研究創作活動助成事業による取組 | 着物のサステイナブルな伝統をラップランド大学に紹介。地域資源を用いた商品開発の価値と方法を紹介する。柳井縞とデニムを用いたファッションの商品開発を実施する。   | ラップランド大学にて講義とワークショップを通じて、日本の着物のサステイナビリティについて紹介。エコロジカルな視点を導入し、柳井縞とデニムを使用した商品開発を行う。           | マルヤッタ・ヘイッキラ・ラスタス教授が来校し、サステイナブルとヒーリングに関する研究を紹介。フィンランドにおける羊毛を用いたヒーリング研究について現状を紹介し、参加を呼びかける。 |
| (2010年度)                     | 柳井縞を中心に、ファッション分野では衣服や生活小物を、そしてインテリアグッズ、たとえば椅子やマガジンラックなどの小物など商品開発のプロトタイプを制作する。  | 山口県立大学では羊毛を用いた、ラップランド大学の研究に参加するとともに、実験のサポートを行う。ラップランド大学では着物に着想を得て、サステイナブルな生活小物やファッションを制作する。 | エコロジカルでヒーリングかつサステイナブルなものをデザイン開発する研究を継続する。   |
| (2011年度)                     | 山口において産学共同研究を行う。平成22年度に制作したプロトタイプから実際の商品を開発し、販売する。ファッションは有限会社ナルナセバ、プロダクトはLBFurnitureと提携して、販売促進などは任せる。共同研究メンバーのグラフィック担当者によって、宣伝広報やパッケージデザインなどを行う。 | 共同開発したものを商品化し、両国にて普及、販売するための方法を研究し、実施に向けて動く。  | 3DCG身体計測機などを用いた、ファッション製品のサイズなどパターン展開を実施し、健常者のみならず、老人や身障者などにも開発したデザインが応用化される方法を模索する。       |

## 1. 2009年度の報告

当共同研究は最終的には地域プロデュースに貢献するための商品開発を行うことである。

共同研究者の井生文隆と筆者はかつて経済産業省中小企業庁が実施しているジャパンブランドの申請に、萩の竹プロジェクトで関わり、成功に導いた実績がある。今回は主に柳井縞を素材テーマにしている。筆者は2003年度に復興10周年イベントに関わった。柳井市を代表する手工芸である柳井縞に加えて、2000年からファッションコンテストでデニムがテーマに取り上げられたことから、現在ではデニムファッションと山口に関連付けて認識されるまでになったデニムを地域資源としての素材テーマとして取り上げている。

2010年には柳井商工会議所は地域資源活用事業として、柳井縞を応援し、調査事業を行った。筆者はその事業の

学識経験者として委員になり、一緒に桐生などの現地調査を実施した。

1993年に織り機が偶然見つかったことをきっかけに、地域の人々が集まり、柳井縞の会が発足された。柳井縞は現在この「柳井縞の会」（現会長 石田忠男）という任意団体が、市の建物である柳井西蔵を拠点に活動をしている。市長や商工会議所会頭なども入っており公共性がある会ではあるが、ビジネスとしての取組がまだ十分ではないために、新しいモデルを検討している状態にあった。

2003年に開催された10周年復興記念ファッションショーで筆者は、企画・演出を担当した。その時以来の関わりである。松尾量子はこの時にジャケットを製作して参加した。柳井縞の伝統的な特徴は藍染を基本としており、比較的地味な柄いきである。それゆえに、もう少し若々しく現代風な縞の開発を示唆したところ、それ以降の開発では縞に幅広い開発がされて魅力的になってきていた。

デニムに関しての、産地は言うまでもなく広島や岡山である。しかしながら以下のような経緯で、現在は山口とデニムが地域に特有の関係として認められるようになってきている筆者は山口県繊維加工協同組合と産学連携で、2000年からファッションデザインコンテストを開催し、2001年からはデニムをテーマにしたファッションデザインコンテストにリニューアルした。なぜなら初年度にコンテストを終えた後で、ファッションデザインコンテストを継続して行く場合には、山口ならではの特徴を出す必要があるという意見が審査委員長の毛利臣男から出たからである。

山口県には西日本に本社がある著名な3デニムメーカー、ブルーウエイ株式会社、ポブソン株式会社そしてビッグジョン株式会社の工場があった。それゆえに、地域のアパレル産業において理解が得られやすい。そしてこれらのメーカーがビジネスをしている日本のデニム製造メーカーであるカイハラ株式会社、日清紡績株式会社さらに倉敷紡績株式会社から功を奏してデニムの提供を受けることになった。

こうした背景と2006年度に第21回国民文化祭やまぐち2006のファッションフェスティバルのテーマにデニムが取り上げられ、広く市民にデニムファッションと山口の関係が定着したことで、デニムが山口の現代の地域資源として認識されるようになってきた。

柳井縞の会は復活後、徹底して手染手織りにこだわり、手工芸に徹している。手仕事ゆえに非常に高価で、単独での商品開発は非常にリスクが高い。また、柳井縞は着物地用に染織されるために、部分的にカットして販売することもあまり望まれないということで、着物以外のものを開発する上で課題でもある。

商品開発に関しては、前述したように柳井縞の着物や生地を用いた用品などに、現代的な意味でのおしゃれな印象を与えること、さらに若い世代が興味を持つような柳井縞をアピールする必要もあった。そこで、山口らしいイメージされるデニムと柳井縞を組み合わせることによって、山口の新しい生活文化を創れるのではないかと考えた。

初年度の2009年は、まず12月初旬にラップランド大学に筆者が学生とともに出かけ、商品開発のステップとして衣服を制作し、残り布で生活用品を作成するという課題でワークショップを実施した。筆者は現地でワークショップのための講演を行った。ここでは、2008年度に実施したファッションショーの紹介をして、我々の創作のスタンスを理解してもらうよう努めた。さらに、創作のための着想源とするために「日本の着物の美学と構造」について講義した。各大学から1人ずつの4組グループを作りワークショップを行った。ワークショップの参加者は大矢真理奈・田辺千寿（生活科学部環境デザイン学科4年）、田村智香・武永佳奈（国際文化学部文化創造学科3年）、田村末奈美・岡田奈緒（大学院国際文化学研究科1年）、そして岡部隆則（大学院国際文化学研究科2年）の7名である。

ラップランド大学の学生は、筆者の講演内容を正しく理解し、着物文化への興味を抱いたようだ。その結果がそれぞれの作品コンセプトに反映されている。同時に、日本側の学生は同じ作品を二人でデザインし作るという困難を乗り越えるために、双方で会話を深め、フィンランドの生活文化についても理解するようになった。

その結果、非常にユニークな作品が4点（写真4～11）できたことは、ワークショップの大いなる成果である。山口の地域資源として日本から持ち込んだデニムと柳井縞の組み合わせによる若々しいデザインによって新鮮な印象が与えられた。ラッピンカンサという新聞の記事にこのワークショップが掲載されたことで、ラップランド大学の教職員だけでなく市民にも柳井縞は有名となった。

これらの作品は、2010年度に開催されたクリスマスインスピレーションにおけるファッションショーの部で発表され反響を呼んだ。

2009年12月には山口県立大学がラップランド大学に出かけて交流したことに對して、2010年1月末にマルヤッタ

=ヘイッキラ ラスタス教授が山口県立大学を訪問し、フィンランドのデザインにおけるサステナビリティについて講演を行った。さらに、山口県立大学側の共同研究者との会議をもち、今後のテーマについての話し合いをした。マルヤッタ教授による現在のラップランド大学における共同研究のプレゼンテーションから、我々はサステイナブルとエコロジーに加えて新しく「ヒーリング」をも次年度のキーワードとしてテーマに加えることにした。

以下に2009年（平成21年）度の実績を記述する。

●（2009年度）の実績

メンバー：水谷（リーダー） 井生 田村 松尾 小南 小橋

実施内容：

- (1) 平成21年12月に研究リーダーの水谷がラップランド大学を訪問し講演とワークショップを実施
- (2) 平成22年1月21日～25日の間、共同研究者マルヤッタ・ヘイッキラ＝ラスタス教授（芸術学博士 クロージング&テキスタイル学科ファッションデザイン専攻）が来校。

1月21日(木)

柳井稿の会訪問（柳井西蔵）、共同研究の成果を報告

講演会の実施（午後4時30分～午後6時 F204教室）

テーマ 地域資源を生かした豊かな生活文化とサステイナブルデザイン

－ フィンランド・ファッションの世界 －

主催：国際文化学部

共催：山口EU協会

本講演会は生活文化論受講生、文化創造学科企画プロデュース系一般学生、地域住民などで、山口EU協会セミナーとしても実施した。

観客は優に200名を超え、立ち見となり大いなる反響を得た。

1月22日(金)

共同研究者によるランチミーティング

議題：前半 マルヤッタ・ヘイッキラ・ラスタス教授のプレゼンテーション

(1) Sustainable design project - recycling theme (EKO) 2007

持続可能なデザインプロジェクトーリサイクルの課題

(2) Research project about special clothes with intelligent properties for disabled (VAPI) 2007

老人、身障者などのための知的な優先性をもった特別な衣服に関する研究プロジェクト

(3) Healing wool - project (HOIVI) 2006-2007

老人や病人などのための治癒あるいは癒しを行う羊毛用品の開発プロジェクト

(4) Sami handicraft education project (DUODJI) 2006-2007

サーミ人（フィンランド等北欧3国の北極圏に暮らす民族）の手工芸教育プロジェクト

後半 2010年度の共同研究の可能性とその内容

## 2. 2010年度の報告

2010年度は11月に本学から筆者に加え、井生文隆、田村洋、松尾量子がラップランド大学を訪問した。井生、田村、水谷はワークショップのために、クロージング&テキスタイルデザインのワークショップ参加者にプレゼンテーションを実施した。まず筆者が「融通無碍－折る・畳む」をテーマにプレゼンテーションを行った。続いて同行した筆者の研究室の大学院生、松永美代子と木村和枝および学部生、貞木梨沙と鮎川真琴が、ワークショップで折り紙や着物の着付けに関するデモンストレーションを行った。井生はプロダクトデザインの分野から、自身の「サステナビリティ」と山口の地域資源を生かした作品制作に関する紹介をした。特に萩における竹プロジェクトに関する活動について説明をした後、今回提案する竹を素材とした紙や合板についての表現を示唆した。田村はアジアの楽器を演奏し、日本の音楽文化の紹介をした。日本の音文化から生まれるヒーリングについての感性を説明した。松尾はワークショップ参加者を含めたデザイン学部の学生に対して「包む 折る Tsutsumu, Oru Wrapping and Folding Culture in Japan」をテーマに、日本の包む文化について特に折るに論点をあて折り紙の体験を含めた内容の講演を行った。

筆者は特に服飾デザインの視点から、昨年の着物の折る・畳む文化に加えて、「融通無碍」をテーマに加えた。

日本の住生活において衝立、障子、襖、畳、お膳などを使用することで、空間に機能が与えられたり、季節感がもたらされたりするなど、自由に空間が変化する様子を紹介し、服飾デザインに対するアイデアを提供した。

今回の素材については、日本からはデニムと柳井縞に加えて、徳地手漉き和紙や竹素材の紙さらに加工された竹の板を持参した。ラップランド大学ではフェルトのワークショップを計画していた。学生は4つのグループに分かれて作品のアイデアを討論し部分的なモチーフの試作をした。

そこで参加したメンバーの専門性や興味を理解して、それぞれのグループに以下の方向性を作り製作アイテムを示唆した。1.ジャケット 2.ジャケットと小物 3.リビングルームのインテリア 4.ダイニングルームのインテリアをテーマにグループごとに作品を製作することになった。各グループがワークショップで提示されたプレゼンテーションを受けて、ユニークな作品を制作した。これらの作品は、上述のクリスマスインスピレーションの展示会の部で展示された。

2回目になるこの年のワークショップではラップランド大学の学生の意向で、グループに分かれてテーマを話し合ったが、最終的にはそれぞれの学生が1人1点を制作するという方法になった。主にジャケットのパートでは両文化が融合するという視点では少し不十分だったかもしれない。しかしながら、十分な準備をしていたラップランド大学側の学生の作品は、テーマを理解した折る・畳むのアイデアを服飾デザインにおとし込んだユニークな作品になったことはワークショップの意義ある結果だと考える。

また、今回はテキスタイルの教員からのフェルト制作のワークショップがあり、新しい技術を学んだ山口県立大学の学生はそれぞれに新しい表現を試みた。この学びは参加しなかったゼミ学生にも影響を与えた。卒業・修了制作に向けて2010年度のワークショップに参加しなかった筆者のゼミ生の作品にもフェルトの創作や既成のフェルトが使用され、ユニークな作品が生まれたことは国際共同研究における学生間の創作交流の成果である。こうした観点からも、学生のワークショップ参加は、いろいろな波及効果を生んだ。

2010年4月に江里健輔学長一行がラップランド大学を訪問し、山口県立大学とラップランド大学が学術交流提携を締結した。そこでラップランド大学マウリ・ウラコトラ学長一行が12月に本学を訪問することになった。その時期をとらえて、クリスマスインスピレーション開催の計画が立てられた。そのショーの内容は「服飾デザインと国際アートマネジメントの実践的研究：地域資源を活用したクリスマスファッションショーを事例として」<sup>(註2)</sup>で報告したので、参考にされたい。

特に共同研究としては、ロバニエミ市とラップランド大学の支援により、ラップランド大学教員3名、大学院生1名そしてEU公認のサンタクローズが山口に派遣されてきた。これは国際化推進室のロバート・シャルコフ室長の協力を得た結果、実現にこぎつけられた。

山口県立大学主催で行われたクリスマス・インスピレーションは、1,500人収容できる山口市民館大ホールでファッションショーやサンタクローズとの交流会が実施された。ここでは本学のラップランド大学との学術交流協定の締結が市民にアピールされるとともに、ロバニエミ市の魅力も紹介された。ロバニエミ市の生活や文化を伝えるインスタレーションについては小南英昭と小橋圭介が担当した。また企画立ち上げには国際文化学部岩野雅子学部長が調整役を担った。プロデュースや広報は経営企画部長木村泰則が担当した。

また舞台の部でのファッションショーでは2009年度と2010年度にラップランド大学で行われたワークショップの作品が発表されるとともに、ゲストを舞台の上で紹介した。この企画によって市民に本学の国際交流や共同研究の実態が理解されたに違いない。同時に、山口市民会館展示ホールでは展示会が行われ、柳井縞の会やデニム関係者などとラップランド大学からの来山者である教員や学生とミーティングを持つことができたことで、その後の商品開発へのモチベーションが高まったことは、有意義であった。

#### ● (2010年度) 共同研究計画

(1)マルヤッタ教授のプレゼンテーションを受けて、今後の共同研究の可能性について討論した。以上の4つのプロジェクトには、フィンランドおよびラップランドの地域特有の自然および文化資源を生かした研究がなされており、当グループが設定した地域資源を生かした豊かなライフスタイルの創造を目指すというテーマに対して、双方の研究テーマ、方法、地域産業との関連において、比較しながらよい影響を与え合える可能性が導かれた。

→共同セミナー、研究ミーティング等を実施

(2)同時に、テーマによっては今回の柳井縞とデニムを用いた衣服や生活用品の開発研究のように、両大学が共同で

デザイン、開発等を行うことができる。

→ワークショップの実施

### (3)地域への波及効果

従来のサステイナブルな研究+Healingをキーコンセプトに加えて、家具、生活用具および服飾などの開発を行う。

近未来的素材を視野に入れた生活用具や服飾などを開発する研究を実施することで、地方独立行政法人山口県産業技術センターなどの施設や器具の協力を得たり、共同での技術開発などへと波及させることが可能である。

さらに、本学の地域共生センターの協力なども得つつ、研究開発に関する企画プロデュースを行うことで、地域における企業と企業を結ぶ、あるいは地域の行政、商工会議所および企業など、あるいは各種施設などとの架け橋を担うことが実現され、地域産業の活性化に役立てることができる。

### (4)学際的研究への展開

将来的に健常者のみならず、老人、身体障害者あるいは病人なども視野に入れた研究開発に発展させることで、デザイン領域のみならず、福祉や看護などとの共同研究へと発展させる可能性をもっている。ラップランド大学の研究の実験を、本学との共同によって、福祉や看護領域の学部や関連地域機関と結び付けて協力することも展開可能である。そのことにより、地域の特別な領域への課題発見の可能性もある。

### (5)2010年度共同研究メンバー

：水谷 井生 田村 松尾 小南 山口 小橋（国際文化学部文化創造学科企画プロデュース系スタッフ）

### (6)具体的計画

4月～11月 期間を通じて、共同研究メンバーで研究ミーティングを行い、ジャンルを超えた研究開発へと昇華させる方法論や技術、関連企業との関係、企業間、研究機関やセンターなどとの調整を行う。特にヴィジュアルデザイン系の担当者は、情報発信に関するプロジェクトに関わり、地域プロデュースに寄与する。

6月 プロダクトデザイン関係スタッフが中心となり、ラップランド大学を訪問し、研究経過のプレゼンテーションと共同研究に関するミーティングを行う。なお、研究成果のレベルアップを狙い、フィンランドを代表するデザイナーたちとの交流をも実施し、現状認識と今後の可能性、およびフィンランド、日本双方の事例に関する情報発信などを実施する。

10月 ファッション関係者が中心に現地を訪問し、サステイナビリティとヒーリングに関する服飾研究のプレゼンテーションを実施し、共同研究のミーティングを実施する。

さらに、12月に本学で実施予定のセミナーを総合的なセミナーへとレベルアップさせるための、ミーティングなども行う。

ヴィジュアル関係担当者は、テキスタイルなどのクリエイションに関わる。

12月中旬に、ラップランド大学の学長以下、研究者が数名、本学を訪問する計画があるので、そこでマルヤッタ・ハイッキラ・ラスタス（ファッションデザイン）、ミンナ・ウオッティラ（産業デザイン）およびトゥイヤ・ハウタラ＝ヒルヴィオヤ（民俗学・美学）などの来校を期待し、セミナーを実施し、地域の行政、企業関係者、一般市民などを交えて情報交換し、研究開発等のコーディネーションにつなげる。

音楽関係スタッフは、ヒーリング音楽の研究創作による成果を、訪問団来校時に発表する。

1月今年度の実績をもとに報告書を作成する。実績は学会や展覧会などで発表する。

平成23年度の共同研究の予算申請を実施する

\* 以上の研究は国際化推進室の協力を期待するものである。

## ●2010年度の実績

### (1)各大学での研究：山口県立大学側

柳井縞とデニムを用いた地域ブランドを創造（大学発ブランドとして確立）

アイテム ファッション（着物関連、洋服関連） インテリア

観光や土産用品（生活小物－ファッション関連、インテリア関連）

⇒地域プロデュースとして、ファッションにおいては柳井縞の会、匠山泊、千々松製紙所および有限会社ナル

ナセバとのコラボレーション、インテリアにおいては鳳山堂、TAKE Create Hagi、そしてLBFurnitureとのコラボレーションなどの道筋ができた。従って、平成23年度は実際にブランディングを行い、商品開発を行うことが可能となった。

(2)柳井縞の会と共同研究者の会合

日 程 2010年10月6日 11:00～12:50

場 所 国際文化学部会議室

参加者 本学 水谷由美子、田村 洋、井生文隆、小南英昭、松尾量子、山口 光、小橋圭介 7名

柳井縞の会 石田忠男（会長）、藤坂和子（事務局長）、福田まゆみ、藤川由美子、森重起枝 5名

(3)融合研究創作

両大学においてミーティング、ワークショップを実施する

キーワード：エコロジー サステイナブル ヒーリング

⇒山口県立大学～ ラップランド大学訪問

教員4名 国際文化学部文化創造学科生2名 大学院国際文化学研究科生2名

講演会およびワークショップ実施

(4)ワークショップをラップランド大学にて実施

着物を着想源にした両国文化を融合したファッションの開発、デニムと柳井縞を使った上着の開発 残り布で服飾小物を開発、インテリア小物の開発

(5)ヒーリング音楽のプレゼンテーション

田村洋によりクリスマスインスピレーションにおけるサンタクロースとの交流の部のための作曲を発表

(6)研究成果の発表

①柳井縞は草木による手染めで、手織りの手工芸品で、現在、ブランド化を目指して活動中である。山口県立大学としてはデニムと柳井縞の組み合わせを基本として、地域ブランドを構築する。

日程：2010年8月～2011年3月

②柳井縞に関して、産公学で進行しはじめた「柳井縞調査研究事業」と連携し、ブランディングやマーケティングなども視野に入れた研究予備調査も実施する。

平成21年度のワークショップ成果を発表・検証

日程：2010年8月11日～13日

会場：RIN\*

東京都港区北青山3-6-26)

\*中小企業基盤整備機構が、地域の中小企業が有望な地域資源を活用して行う新事業を支援する地域資源活用支援事業の一環として、東京・表参道にオープンしたアンテナ ショップ

③創作活動：大学主催「クリスマスインスピレーション」（2010年12月13日）において、ファッションショー（山口市民会館大ホール）と展覧会（市民ギャラリー）を実施

DVDにて記録作成公開

④ロバニエミで開催されたラップランド大学主催の展覧会「Hot and cool」に作品展示

⑤論文：水谷由美子・田村未奈美「服飾デザインと国際アートマネジメントの実践的研究—地域資源を活用したクリスマスファッションショーを事例として—」<sup>(註2)</sup>

(7)2011年度計画

①2011度は、地域のコラボレーションをする企業や団体と共同で、地域資源を活かした生活用品やファッション等の商品開発を実施するとともに、大学と地域とが共同で実施する地域プロデュースのモデルを確立し、地域にアピールする。そのための広報用冊子なども作成する。

②12月に第3回目のワークショップを実施する

担当者：水谷由美子、山口光

③2012年ヘルシンキデザインキャピタルに向けて、ラップランド大学主催の展覧会などにて当研究グループの成果を発表するためのミーティングを実施する。

### 3. 2011年度の報告

ラップランド大学との国際共同研究を通じた交流は2011年度が当初計画の最終年である3年目となった。

2年間の交流の成果が学会活動に波及し、全国の専門家とラップランド大学の共同研究者との活発な交流を導き出した。まず、ここではこのことから報告する。2010年度国際服飾学会大会が山口県立大学で開催された。そこで、山口県立大学大学院国際文化学研究科2年の田村未奈美が代表で2009年度に行ったラップランド大学との共同研究で行ったワークショップについて発表した。学会員から大きな反響があり、8月の海外学術研究会をフィンランドにて開催してほしいという要望が出た。そこで、筆者は国際服飾学会の2011年度海外研修に関する実行委員長になり、ラップランド大学とアールト大学（旧ヘルシンキ芸術デザイン大学）の両大学にて、口頭発表会、講演会そして作品の展覧会を開催する計画を立てた。学会員に応募したところ、すぐに約30名程度が集まったが、最終的には28名の参加者を得て研修が実施された。

8月下旬にまずラップランド大学から研究会を始めた。2010年度のラップランド大学における山口県立大学とのワークショップにおいて、フェルトの制作を行った成果を生かして、学会の研修においても、フェルトのワークショップを2回、それぞれ3時間程度で行った。参加者はアクセサリーやバッグなど自由なアイテムを選んで制作したが、非常にユニークなものが出来上がった。その後、マルヤツタ教授の講演、そして口頭発表と展覧会に作品出展した参加者のプレゼンテーションを行った。本学の大学院生、木村和枝、浅田陽子、松原直子の3名と修了生、西脇未美そして共同研究者、松尾量子が筆者とともに参加した。大学院を国際学会に参加させる好機とすることができたことも一つの成果である。

ラップランド大学国際化推進室は、山口県立大学との交流を背景として夜の歓迎交流会を主催した。学会活動にもこの共同研究を通じた大学間交流が有効な結果をもたらし、3年間の交流の蓄積と成果を実感した。

その時に、新しく建設されたデザイン学部の校舎に建築的な問題が起きて、12月初旬に引っ越すことになったことをはじめて聞いた。当初予定していた本学の共同研究のワークショップの時期が11月中旬に早める必要が出てきた。当初は、3年目の創作研究は双方の国で行うことになっていたが、2010年度にヘルシンキがデザインキャピタルに選ばれるために、ロバニエミでもこの動きに連動して、ロバニエミとヘルシンキで展覧会などを行う計画があり、それに参加するように提示された。

そこで、3年目も続けてワークショップを開催することにした。山口光も同行する予定であったが、上記の理由で11月中旬にフィンランドを訪問することになり、予定が合わず筆者だけでラップランド大学に行くことになった。学生は大学院生の武永佳奈と藤田幸司と学部生杉山優貴であった。

今回は現地の学生5名が参加し、双方の学生が一緒に3グループで3セットの作品を作成することになった。今回は日本からはデニムと柳井縞を持参し、ラップランド大学からはフェルトとトナカイの皮革が用意されていた。ラップランド大学もトナカイの皮革を輸出している企業の提供を受け、地域資源を生かしたファッションに取り組んでいる。

今回はテキスタイルの学生は参加していなかったが、山口県立大学のファッションを学ぶ大学院生がデニムの加工をしたことに触発されて、結果として素材作りにも工夫が行き届いた作品が生まれた。量産に向けた商品開発をテーマにしていなかったため、かなり造形的な作品となった。両国の学生が言語の壁を越えて、互いの考えを述べ合いながら、最後には双方の文化を融合させた作品を作ることができた。

今年是最終年で、共同研究者の各分野が商品開発を目指して現在準備中である。筆者のジャケットプロジェクトは、匠山泊と有限会社ナルナセバの協力によりプロダクトをした。ワークショップのテーマである'Apotheosis between body and clothing'に基づき、究極の形つまり簡潔な形を意識したデザインをした。デニムはある程度厚みと硬さがあるために、1枚仕立ての服を作ることが可能である。その特徴を生かしたジャケットを4種類とタイパンツを参考にしたタイ風デニムパンツを商品化した。タイパンツの前ウエスト部の紐の裏部分には異なる種類の柳井縞を付けることで、特徴を出した。

12月18日に山口県立大学講堂桜園会館で開催されたクリスマスファッションショーVol. 8「Trip in Yamaguchi」において、国際文化学部国際共同研究として上記のワークショップ作品および企業とのコラボレーションによって作られた作品が発表された。昨年に続き、今回の作品も2月中旬にロバニエミ市で開催されるデザインウィークにて展覧される予定である。

2011年11月10日にロバニエミを訪問した際、ラストス教授と2010年のお礼を言うためにロバニエミ市財務部長エ



ルッキ・カウットを訪問した。その際にラスタス教授が、2012年度は、ラップランド大学が山口県立大学を訪問してワークショップを開催したい旨を述べ、協力を求めた。そこで、カウットは2010年の活動を評価しており、ラスタス教授が依頼した来年度のプロジェクトへの計画の資金的援助について、非常によい返事が返ってきた。その結果、来年度はラップランド大学から教員と今回ワークショップに参加した学生たちが山口県立大学を訪問して、ワークショップを実施することになった。

#### 4. まとめ

「地域資源を生かした豊かな生活文化の創造をめざして」をテーマとして、「地域資源」「エコロジー」「サステイナブル」、「ヒーリング」をキーワードにしたライフスタイルの創造を目指して、国際共同研究を実施した。共同研究以前にラップランド大学では、フィンランド特有のウールを用いて、ヒーリングウールの開発プロジェクトを行っていた。また本学においても、地域資源として柳井縞とデニムを用いたワークショップや商品開発を行っていた。

両大学が今回の共同研究をして研究交流をすることで、双方の方法論に関する比較研究や、方法論を参照することが可能となった。今後グローバルな研究創作の場において、ラップランド大学および山口県立大学双方の共同によって生み出された開発手法のモデルとして学会や産業界に提示して行くことを目指したい。

この共同研究において広く汎用性のある新しい方法論を確立することを目指すことによって、現代生活における最先端の課題と地域資源を結び付け、環境問題や人間にやさしい生活スタイルの創造へと導くことが可能になる。

双方の研究は、地域産業の活性化を視野に入れている。山口においては、デニム製造は山口県の地域資源としての認可されているものである。大学ではすでにデニム製造企業や国体、山口県繊維加工協同組合や柳井縞を製造する団体、柳井縞の会などとの交流をすでにしており、活性化に向けた支援を行っているところである。

サステイナビリティやヒーリングをキーコンセプトに新しいアプローチを産業界に提言し、産業界の商品開発やマネジメントへ影響力が持てる研究を実施して行くことが求められる。ファッションはもちろんのこと、プロダクトデザインにおいてもこのコンセプトで実験することで、従来の発想にない成果が得られる可能性がある。

最終的には学問レベルにおいて、地域における課題解決の新しい普遍性のある方法論として、地域資源を生かしかつサステイナブルでヒーリングな効果をもった衣類や生活用具の開発と生活への応用を学際的なレベルで提示することが可能になる。

以上のようにラップランド大学との共同研究から導かれる具体的な問題意識や方法論の確立によって、学会や産業界における創造的視点でのイニシアティブをめざすことが可能となる。

平成23年度の最終的な結果は、別の機会に報告する。現在、2012年3月9日から11日の3日間、山口井筒屋5階の催場にて展覧会を実施する予定である。

最後に、3年間の国際共同研究を継続して来たことで、新しい研究のアプローチが生まれたこと、国際的な大学間の信頼関係が生まれたこと、さらに作品の創作の機会や発信領域の幅の広がりなど大きな成果を得た。

註(1) 水谷由美子「国際交流と地域資源を生かした服飾デザインの実践的研究－フィンランドの大学との国際共同研究を事例として－Practical Research on Costume Design Utilizing International Eychange and Regional Resources : Joint Internationol Research with Universitios in Finland」『国際服飾学会誌No.38』国際服飾学会、2011年。

(2) 水谷由美子・田村未奈美「服飾デザインと国際アートマネジメントの実践的研究－地域資源を活用したクリスマスファッションショーを事例として－」『山口県立大学学術情報第4号(大学院論集)2011』山口県立大学、2011年。

以上の国際文化学部国際共同研究と発表を3年間継続することが可能になったのは、本学江里健輔学長をはじめ小田由紀雄副理事長、経営企画部木村泰則部長、鈴森和則グループリーダー、佐々木雄士主査他事務局の皆さん、そして国際文化学岩野雅子学部長および学部事務室堀祥子、国際化推進室シャルコフ ロバート室長他事務職員の皆さんおよび附属図書館町田敬一郎主査のご理解、ご支援およびご指導のおかげであり、この場をお借りしてお礼を述べさせていただきます。

資料 ワークショップ参加者およびテーマ等のリスト

Yamaguchi Prefectural University=YPU

University of Lapland=UOL

Total theme: Ecology Sustainable Healing

●2009 1st year

Theme:Aesthetic of Kimono and its construction

Conditions for construction:no rest of cloth, Yanai-jima 2m, square denim limited 2m

Students

YPU:Yoshina Takenaga Tomoka Tamura Minami Tamura Marina Oya Chizu Tanabe Nao Okada  
Takanori Okabe

UOL:Sanna Konola Tiina Meriläinen Katja Palomaa  
Eeva Välimaa Marjaana Hietaniemi Johanna Luhio

Group1: Minami Tamura Sanna Konola `A connected cloth`

Group2: Yoshina Takenaga Eeva Valimaa `modern and tradition for dress with an obi-belt and a bag`

Group3: Tomoka Tamura Johanna Luhio `Obi scarf cap`

Group4: Nao Okada Marjaana Hietaniemi `a short cape`

Group5: Marina Oya Tiina Meriläinen `cloth for many use and bag for many use`

Group6: Chizu Tanabe Katja Palomaa `changeable bag`

Profesors

YPU: Prof.Yumiko Mizutani

UOL: Prof.Marjatta Heikkilä-Rastas of Fashion Design

Päivi Rautajoki patterndesign

Prof. Kristiina Hänninen of Textile and Interior Design

●2010 2nd year

Theme:Yuzumuge=Adaptable and Oru & Tatamu

YPU basic keywords=Ecology, Sustainable, Healing

Material theme, =the Regional Resources; Yanai-jima, Denim, Tokuji-washi, Bamboo

UOL=Hot and Cool

Material theme, Wool Felting

Students

YPU: Miyoko Matsunaga Kazue Kimura Risa Sadaki Makoto Ayukawa

UOL: Anni Heinilä Tiina Karvonen Päivi Partanen Solveig Magnusdottir

Leila Saanio Iida Silvennoinen Hanna Turpeinen Vuokko Österberg

Solveig Magnusdottir (ex.student Iseland)

Group1: Miyoko Matsunaga Anni Heinilä Solveig Magnusdottir `works for living room`

Group2: Kazue Kimura Tiina Karvonen Vuokko Österberg `works for dining room`

Group3: Risa Sadaki Iida Silvennoinen Hanna Turpeinen `jackets oru&tatamu`

Group4: Makoto Ayukawa Leila Saanio Päivi Partanen `jackets and bag oru&tatamu`

Profesors

YPU: Prof.Yumiko Mizutani Prof. Fumitaka IO Prof.Hiroshi Tamura Associate Prof. Ryoko Matsuo

UOL: Prof. Marjatta Heikkilä-Rastas of Fashion Design Päivi Rautajoki Lecturer of patterndesign

Prof.Kristiina Hänninen of Textile and Interior Design

2011 3rd year

Theme:Apotheosis between body and clothing

YPU students:Koji Fujita Yoshina Takenaga Yuki Sugiyama

UOL students:Elina Antila Annariina Ruokamo Riikka Kälkälä

Seni Pöyry Susanna Maklin

Group 1:Koji Fujita Elina Antila Annariina Ruokamo 'the geometric form and black color material'

Group 2:Yuki Sugiyama Riikka Kälkälä 'the vertical stripe'

Group 3:Yoshina Takenaga Susanna Maklin Senni Pöyry 'the advent of season'

Cameraman/University of Lapland : Markus Vertanen

YPU:Prof.Yumiko Mizutani

UOL:

Fashion Design

Marjatta Heikkila-Rastas prof.

Leena Rajakangas/fashion Design, lecturer

Paivi Rautajoki/patterndesign, lecturer

Emmi Harjuniemi/digitaldesign, lecturer

Textile and Interior Design

Kristiina Hanninen prof.

Piia Pырstojarvi/textile design

Raija Aatsinki/printing and dyeing

Marja-Liisa Laaksonen, Heidi Pietarinen weaving, lecturer

国際文化学部国際共同研究  
報告書写真集 2009-2011



1 ラップランド大学デザイン学部校舎エントランス photo by Y.M.= 水谷由美子



2 ラップランド大学エントランス photo by Y.M.



3 ラップランド大学図書館 photo by Y.M.

Workshop 1  
2009年12月

Theme

Aesthetic of Kimono  
and  
its construction

Keywords:  
no rest  
cutting off a straight line  
simple  
many functions

Item :  
rest of cloth  
→  
bag or something



4 田村未奈美グループ作品 前は直線裁ち バックは編み込みスタイル  
残り切れはバッグに photo by T.O.= 岡部隆則



5 大矢真理奈グループ作品 着用法①  
photo by T.O.



6 大矢真理奈グループ作品 着用法②  
photo by T.O.



7 大矢真理奈グループ作品 生活用具としての使い方  
photo by T.O.



8 田辺千寿のグループ作品 伸縮自在のバッグ  
photo by T.O.



9 田村智香のグループ作品 フード付ショール  
帯など多様な使い方が可能  
photo by T.O.



10 岡田奈緒のグループ作品 リバーシブルケープ 赤線は背守りに着想されたもの  
photo by T.O.



11 武永佳奈のグループ 帯付きスカート photo by T.O.

Workshop 2  
2010年 11月

Theme :  
YPU = Ecology, Sustainable, Healing  
Material theme,  
the Regional Resources;  
Yanai-Jima ,  
Denim, Tokuji-Washi  
UOL = Hot and Cool  
Material theme;Wool Felting

Purpose :

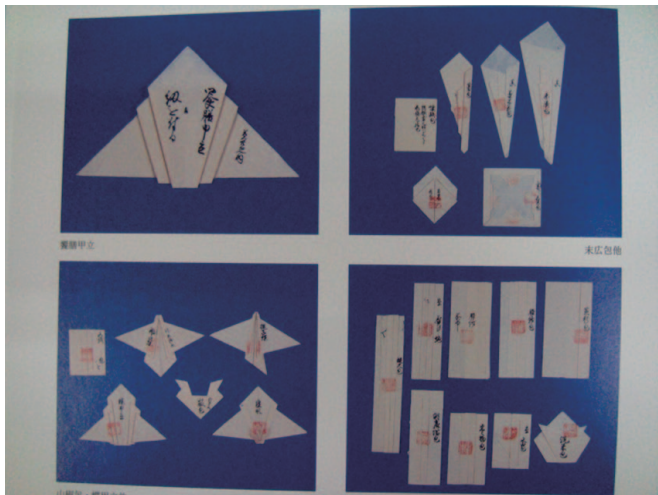
Development of the clothing  
and life goods, using the  
regional resources

Concept :

Development of Kimono  
= Yuhzuhmuge,  
Adaptability

Action theme  
'Folding(oru and tatamu)'

Folding culture in Japan



12 小笠原流緒式折紙雛形 宝永2年(1705)  
写真出典 サントリー美術館『美しの和紙』展カタログ 2009年より



13 東大寺 お水取りと言われる修二会で祈りに用いられる和紙製の椿  
写真出典 サントリー美術館『美しの和紙』展カタログ 2009年より



14 花紋折 内山光弘 昭和時代 日本民藝館  
写真出典 サントリー美術館『美しの和紙』展カタログ 2009年より



Issey Miyake132.5  
15 [http://www.lainclairidge.co.uk/studio/wp-content/uploads/2010/10/132\\_5\\_3.jpg](http://www.lainclairidge.co.uk/studio/wp-content/uploads/2010/10/132_5_3.jpg)



16 [http://medias.francetv.fr/bibl/url\\_images/2010/10/20/image\\_65461698.jpg](http://medias.francetv.fr/bibl/url_images/2010/10/20/image_65461698.jpg)



17 融通無碍  
adaptability in the space of architecture

写真出典 [http://upload.wikimedia.org/wikipedia/commons/thumb/8/87/Old\\_okada\\_house05\\_800.jpg/200px-Old\\_okada\\_house05\\_800.jpg](http://upload.wikimedia.org/wikipedia/commons/thumb/8/87/Old_okada_house05_800.jpg/200px-Old_okada_house05_800.jpg)

## Adaptability

The tool which produces the possibility  
there is adaptability of the space in  
Japanese traditional building

|             |                                  |
|-------------|----------------------------------|
| Fusuma 襖    | sliding door                     |
| Shoji 障子    | paper sliding door               |
| Byobu 屏風    | folding screen                   |
| Tsuitate 衝立 | screen                           |
| Ozen お膳     | low dining table for each person |
| Zabuton 座布団 | Japanese cushion                 |



18 障子のある空間

写真出典 [http://www.interior-heart.com/dictionary/images/GH059\\_L.jpg](http://www.interior-heart.com/dictionary/images/GH059_L.jpg)



19 衝立のある空間

写真出典 <http://www.ovamadanokumiko.com/gallery/images/screen/b03.jpg>



20 屏風のある空間

写真出典 <http://yamagamin.iza.ne.jp/images/user/20070713/100491.jpg>



21 お膳のある空間

写真出典 [http://www.takaosan.or.jp/img/shadowbox/houjyou\\_ozen.jpg](http://www.takaosan.or.jp/img/shadowbox/houjyou_ozen.jpg)





22 障子・襖などを取り払うと開放的な空間となる 宝泉院  
写真出典 [http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%95%E3%82%A1%E3%82%A4%E3%83%AB%E5%AE%9D%E6%B3%89%E9%99%A2\\_02.JPG](http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%95%E3%82%A1%E3%82%A4%E3%83%AB%E5%AE%9D%E6%B3%89%E9%99%A2_02.JPG)



23 国際共同研究ワークショップメンバー 顔合わせ ラップランド大学  
photo by P.R.=Paivi Rautajoki



24 国際共同研究ワークショップ初日プレゼンテーション ラップランド大学  
ワークショップ教室 photo by P.R.



25 国際共同研究ワークショップのための着物プレゼンテーション  
水谷由美子 ラップランド大学 ワークショップ教室 photo by P.R.



26 井生文隆 ラップランド大学でのプレゼンテーション  
photo by P.R.



27 田村洋 ラップランド大学でのプレゼンテーション  
photo by P.R.



28 松尾量子 ラップランド大学での講演  
photo by 松永美代子



29 ラップランド大学 ワークショップ教室  
国際共同研究ワークショップメンバー  
photo by P.R.



30 ラップランド大学 ワークショップ教室  
国際共同研究ワークショップ 折り畳むのプレゼンテーション  
photo by P.R.



31 ラップランド大学 ワークショップ教室  
国際共同研究ワークショップ テキスタイル  
photo by P.R.



33 ラップランド大学 作業室 国際共同研究ワークショップ フェルトワークショップ  
photo by P.R.



34 ラップランド大学 ワークショップ教室  
国際共同研究ワークショップ ミニチュア作成 photo by P.R.



35 ラップランド大学テキスタイル教室 国際共同研究ワークショップ  
オリジナルテキスタイル制作 photo by P.R.



36 ラップランド大学におけるワークショップ 型彫り  
photo by P.R.



37 フィンランド・ラップランド大学からのゲスト 2010年12月13日 山口市民  
館展示ホール クリスマスインスピレーションにて photo by T.S.=志賀敏彦



38 徳地和紙ドレス ディレクション 水谷由美子  
2010年12月13日山口市民館 展示ホール クリスマスインスピレーションにて  
左：武永佳奈 貞木梨紗 右：田村未奈美 photo by T.S.



39 山口県立大学×ラップランド大学共同研究作品  
2010年12月13日山口市民会館展示ホール  
クリスマスインスピレーションにて photo by T.S.



40 山口県立大学×ラップランド大学  
2010年12月13日山口市民会館展示ホール  
クリスマスインスピレーションにて  
ダイニングルーム 木村和枝のグループ photo by T.S.



41 山口県立大学×フィンランド・ラップランド大学 共同研究作品  
2010年12月13日 山口市民会館 展示ホール  
クリスマスインスピレーションにて photo by T.S.



42 山口県立大学×フィンランド・ラップランド大学 松永美代子のグループ リビ  
ングルームのために 松永作品左 2010年12月13日 山口市民会館 展示ホール  
クリスマスインスピレーションにて photo by T.S.



43 山口県立大学×フィンランド・ラップランド大学 共同研究作品  
2010年12月13日 山口市民会館 展示ホール  
クリスマスインスピレーションにて 右から3着目ジャケット 貞木梨紗  
photo by T.S.



44 クリスマスインスピレーション 前列4点 ラップランド大学学生作品  
中央2点 材料はトナカイの革  
2010年12月13日 山口市民会館 展示ホール photo by T.S.

Workshop 3  
2011年11月

Theme :  
Apotheosis  
between body and clothing

**Material theme :**  
**Understanding  
nature of materials  
and  
keeping nature alive**

**Purpose :**  
**Development of Jackets  
and  
life goods**

**Kinds of Material :**  
**regional resources  
from Yamaguchi and Lapland ;  
Denim/Yanai-jima/Tokuji-washi  
and  
Wool /Raindeer skin**

**Apotheosis between body and  
clothing  
- The ultimate beauty -**

**Reference of architecture:  
Ise shrine**



### **Architecture of Ise Shrine**

**Bruno Julius Florian Taut (1880-1938)**

「日本がこれまで世界に与えた一切のものの源泉、あくまで独自の日本文化をひらく鍵、完成した形の故に全世界の賛美する日本の根源 — それは外宮、内宮および荒祭宮をもつ伊勢である。」

『日本美の再発見』より ※

45 伊勢神宮内宮正殿

写真出典 [http://upload.wikimedia.org/wikipedia/commons/c/c9/Naiiku\\_01.JPG](http://upload.wikimedia.org/wikipedia/commons/c/c9/Naiiku_01.JPG)

※ブルーノ・タウト 篠田秀雄訳 『日本美の再発見』 増補改訳版、岩波書店、1962年、43頁

これほどに、長い歴史に耐えてきた正確なフォームが、またあるだろうか。…日本建築のその後の展開は、すべて伊勢に発しているといってもよいだろう。

素材の自然なあつかい、形態比例の感性、空間秩序の感覚、とくに建築と自然との融合などの、日本建築の伝統は、すべてここに起点をもっている。

丹下健三<sup>※</sup>

※丹下健三・川添登・渡辺美雄共著 『伊勢—日本建築の原形』 朝日新聞社、1962年、3頁

伊勢のフォームを創造した古代人のたくましい構想力の背後には、日本民族のエネルギーがそれを支えていたのである。この伊勢のフォームには、日本民族の原質が含まれている。

丹下健三<sup>※</sup>

※丹下健三・川添登・渡辺美雄共著 『伊勢—日本建築の原形』 朝日新聞社、1962年、4頁

## Traditional Life Style In Finland



46 シーダ美術館 古い様式の住居 2011年8月21日 photo by Y.M.



47 シーダ美術館 食料庫 イナリ 2011年8月21日 photo by Y.M.



48 シーダ美術館 古代の家 イナリ 2011年8月21日 photo by Y.M.



49 森のトナカイ ロバニエミからイナリへの途上の高速道路沿いにて  
2011年8月21日 photo by Y.M.



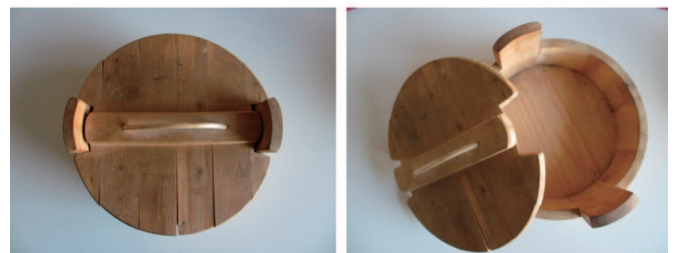
50 森のトナカイ ロバニエミからイナリへの途上の高速道路沿いにて  
2011年8月21日 photo by Y.M.



51 サミー族のカップ マルヤッタ=ヘイッキラ ラスタス所蔵  
photo by Y.M.



52 白木を生かした生活道具 古いバター入れ マルヤッタ=ヘイッキラ ラスタス所蔵  
photo by Y.M.



53 森で使われるナイフ マルヤッタ=ヘイッキラ ラスタス所蔵  
photo by Y.M.

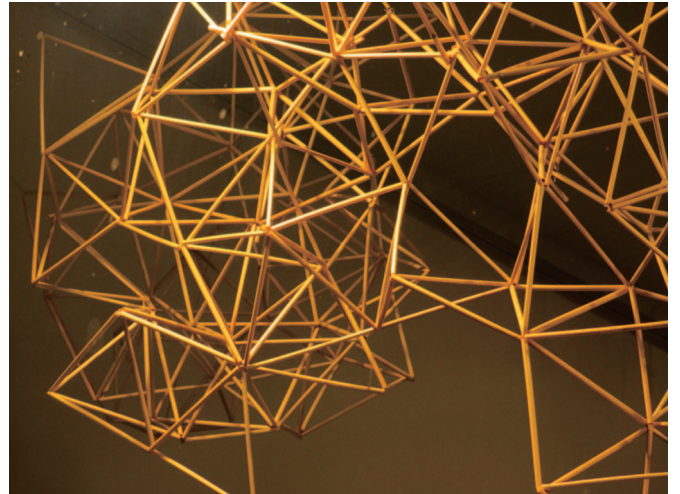


54 白木を生かした生活道具 左上 旧新のバター入れ 他3点水呑み道具  
マルヤッタ=ヘイッキラ ラスタス所蔵 photo by Y.M.





55 ハンヌ・カホネンデザインのヒンメリ  
ヘルシンキのブティック  
2011年11月16日  
photo by Y.M.



54 ヒンメリの詳細 photo by Y.M.



57 国際共同研究ワークショップメンバー 顔合わせ  
2011年11月8日 ラップランド大学 会議室 photo by M.V.=Markus Vertanen



58 ワークショップ イメージボード 藤田幸司グループ photo by M.V.



59 イメージボード制作  
2011年11月8日 ラップランド大学ワークショップ教室 photo by M.V.



60 フィンランド素材 トナカイの革の品定め  
2011年11月8日 ラップランド大学ワークショップ教室 photo by M.V.





61 学生食堂でのブレイクタイム photo by Y.M.



62 ワークショップ作品発表  
2011年11月13日 ラップランド大学 中央ホール 階段 photo by M.V.



63 ワークショップ合評会後のメンバー  
2011年11月13日 ラップランド大学中央ホール階段 photo by M.V.



64 2011年12月18日 山口県立大学講堂 桜園会館 クリスマスファッションショー Vol.8 国際共同研究ワークショップ制作作品 左 杉山優貴グループ 中央 武永佳奈グループ



65 国際共同研究ジャケットプロジェクト 水谷由美子作品  
モデリング 武永佳奈 プロダクト 岡部隆則 photo by T.S.  
2011年12月18日山口県立大学講堂桜園会館 クリスマスファッションショー Vol.8にて発表



66 国際共同研究ジャケットプロジェクト 水谷由美子作品  
2011年12月18日山口県立大学講堂桜園会館 クリスマスファッションショー Vol.8にて発表 プロダクト 匠山泊 photo by T.S.



67 国際共同研究ジャケットプロジェクト 水谷由美子作品  
2011年12月18日 山口県立大学講堂桜園会館 クリスマスファッションショー  
Vol.8にて発表プロダクト 匠山泊 photo by T.S.



68 国際共同研究ジャケットプロジェクト 水谷由美子作品  
2011年12月18日 山口県立大学講堂桜園会館  
クリスマスファッションショー  
Vol.8にて発表 プロダクト 匠山泊 photo by T.S.  
左 ジャケット表地 柳井織



69 国際共同研究ジャケットプロジェクトフィナーレ  
2011年12月18日 山口県立大学講堂 桜園会館 クリスマスファッションショー  
Vol.8 photo by T.S.